

Bozak AR-4

[基本事項]

電源を入れる前に、電源ケーブルがリニアPSU（電源）とミキサーの両方にしっかりと押し込まれていることを確認し、スクリーカラーが締まっていることを確認してください（締めすぎないようにご注意ください）。

ミキサーのON / OFFを行う前に、スピーカー、アンプなどの電源を切っておくことをお勧めします。ミキサーの電源を入れたり切ったりすると、回路に電流 / サージが流れ、「プツ」というポップ音が発生します。

直射日光や、電源、アンプ、ヒーターなどの熱を発生する機器から離れた場所に設置してください。操作や保管の際には、過度の汚れ、ほこり、熱、振動から保護してください。タバコの灰、飲み物、煙、特に喫煙の煙がかからないようにしてください。共振や振動のある場所に電源ユニットを設置しないでください。

[セットアップ]

Bozak AR-4のヘッドホンボリュームは非常に大きく、「1~3」ぐらいでもかなり大きいのでご注意ください。まずは音出しの前にヘッドホンボリュームのポットを必ず「0」に合わせてください。ボリュームを上げる際も少しずつ上げるようにしてください。

ターンテーブルまたはCDを再生し、PGM-Channelポットを「7~8」（「8~10」はゲインレンジ）まで上げます。メータースイッチを「master」に切り替えた状態で、マスター出力メーターの針がメーター上で0dBのピークに達するまでMasterポットを回して、お部屋に合ったレベルにします。

基本的な位置が決まったら、ソースレベルに応じて、PGM-Channelポットを微妙に上げ下げして、マスターメーターの出力が0dBのピークを維持します。これは、ミキサーを使用して最高の音質を実現し、ミキサーの正しいレベルを維持するための正しい方法です。部屋の音量をもっと小さくしたり、大きくしたりする必要がある場合は、スピーカー / アンプ側の音量調整をおすすめします。

注意：メータースイッチが「CUE」に設定されている場合、メーターは任意のレベルを示し、左右両方の信号が存在することを確認できません。しかし、これは入力 of 正確なレベルではありません。ミックスの時は耳を使ってブレンドしてください。

[エフェクターの使用方法]

エフェクターを繋げて、ミキサーのセンド&リターンを利用するためには、「TRSのYケーブル（一本のケーブルから二又に分かれるケーブル）」が必要になります。ミキサー背面の「Loop」差込口のSND（センド）とRTN（リターン）にそれぞれ、YケーブルのTRS側を差し込みます。エフェクター側には二又に分かれたTS側のケーブルを差し込みます。

※AR-4の仕様上、「Loop」の差込口にジャックを挿すと、AR-4とエフェクターとの信号経路のループが完成するまで音が出なくなりますので、エフェクターを使用しない場合は「Loop」の差込口は使用しないでください。また、ミキサー側でエフェクトのかかり具合（ドライ&ウェット）をコントロール出来ませんので、エフェクター側で調整する必要があります。

[Larry Levanのミキサー使用方法]

まず、入力レベルのポットを最大にすることはNGです。個々の入力レベルを上げて全体的なボリュームを増やそうとすると、ミックスのボリュームをマッチングするためのヘッドルームに余裕がなくなるだけです。

全体的なボリュームレベルを得るためには、必ずマスターレベルを調整してください。ミキサーはアンプを駆動しているのでMasterポットはアンプへの信号源として最も信頼性が高いことを覚えておいてください。これにより、ターンテーブル間のミキシングを行う際の柔軟性が高まります。

最高のサウンドを得てミキサーを効率的に動作させるために、Larry Levanは常に6と8の間のインプットレベルを使用していました。このように使用することで、8から10をチャンネルのゲイン（増幅領域）とすることができ、全体的なマスターボリュームを損なうことなく、一定のボリュームのリファレンスを得ることができます。また、一貫したレコードの出力レベルを維持することができます。

Masterポットを全体的に望ましいリスニングボリュームに設定することも大事です。通常、低～中程度のリスニングレベルには「3～6」の間、大音量のリスニングレベルでは「6～9」の間に設定します。アンプのオーバードライブを避けるために、Masterポットを「10」に設定することは避けてください。

Larry Levanは音質に関しては完璧主義者でした。彼は耳を保護するため、DJブースのモニターレベルに非常に気を配っていました。彼は一晩中ブースモニターを鳴らすことはなく、ほとんどの場合、ブレンド・ミキシング時にのみブースモニターを使用していました。ブレンドが終わると、彼はブースモニターの音量を下げ、ハウスモニターの音量とサウンドに注意を払っていました。必要な時にのみ利用する”スポットモニタリング”は、夜が更けても耳が疲れないようにしてくれます。